

目次

第21回大会関連	P1	2009年度国際シンポジウムのお知らせ	P8
大会開催要項等	P3	2008年度国際シンポジウム報告	P9
大会プログラム	P4	ソシオロジー Rooted in Life	P24
大会会場へのアクセス	P6	事務局からのお知らせ	P32

■第21回大会関連

■日中社会学会21回大会に向けて

中村則弘（愛媛大学）

名古屋大学にて第21回大会を開催することとなった。プログラムは、別添されることとなるだろうが、関係者のご努力にまずもって深い感謝の意を表したい。

これまでの大会において、名古屋での開催は一度も無かったと思う。中京圏に在住する会員はかなり多い。また、中国との関係でも、重要な意味をもつ土地柄である。21回目という、いわば開催の第3クールの出発点を名古屋で行うことは、記念すべきことがらではないだろうか。これを機会に、本学会における取り組みへの決意も新たなものになればと思う。

今回の大会では、折原浩先生の特別講演が設定されると聞き及んでいる。先生はウェーバー研究、理論社会学の大家である。とりわけ若い時、先生の著作からずいぶんと啓発を受けた思い出がある。いうまでもなく、ウェーバーにかかわる研究は、われわれが中国、アジアをみてゆくときの重要な出発点と考えてもよい。その

折原先生に直接お話を聞かせていただけるということは、とりわけ若手の各位にとって望外の喜びと言う他ないと思う。先生がご高齢であることは承知しており、その思いは格別である。

温故知新という、勿体をつけたような趣を感じてしまう。しかし、良い言葉である。折原先生のご講演と言う事を聞き、どうもわれわれは「知新」ということに流されがちであり、「温故」を忘れがちになっているのではと思いついた。時代の趨勢であり、やむを得ない面もある。しかし、行き詰まりが感じられる時代状況を打ち破るために大事なものは、ちゃんと「温故」ができていたかどうかのように思えてならない。折原先生のご講演は、この面でとりわけ意義深いものと位置づけられるだろう。

改めて、本大会の名古屋での開催は、少なくとも中国との関係では「知新」の最前線の土地で、「温故」を活かしたものとなる。考えてみれば、折原先生のウェーバー研究は、「温故」と「知新」を見事に結んだものに他ならない。素晴らしき巡り合わせを感じてしまう。その成功を願ってやまない。

■日中社会学会第21回大会を お受けするにあたって

黒田由彦(第21回大会実行委員・名古屋大学)
西原和久(第21回大会実行委員・名古屋大学)

伝統ある日中社会学会の第21回大会を、私どもの名古屋大学で開催できることを大変、光栄に思います。

名古屋大学の文学部社会学研究室は、今年で設立60周年の節目を迎えます。これまで、名古屋大学は、文学部においては、初代の本田喜代治教授のあとも、阿閉吉男教授、折原浩教授など日本の理論社会学の柱となる教授陣を有しておりました。また、文学部の北川隆吉教授、旧教養部(現在の情報文化学部)の中田実教授、今年定年で退任された貝沼洵教授などの教授陣も、理論と実証の結合に努め、地域研究にも大きな足跡を残してきました。

2001年、名大の社会学は文学部と情報文化学部(旧教養部)が大学院レベルでは統合され、大学院環境学研究科の社会環境学専攻・社会学講座として、あらたな一步を踏み出しました。そして本年度のはじめには、念願であった文学部社会学教員と情報文化学部社会学教員が同じ研究棟の同じフロアに結集するができ、文字通り、社会学教員が一体となって、研究・教育にあたる新たな土台ができました。

現在、名大大学院の社会学講座は、8名の専任(欠員1名含む)と助教の9人体制で運営されております。院生は、OD等を含めて総勢で40名余りおります。大学全体としては、さらに国際言語文化研究科、教育発達科学研究科、国際開発研究科などにも社会学の教員や院生がおり、来年度には日本社会学会の年次大会の開催が決まっています。

とはいえ、名大社会学の中核となるべき、私どもの社会学講座は、理学系、工学系、そして

人文社会科学系の3つの専攻からなる文理融合の大学院である環境学研究科に属していません。学部教育は、それまでの所属学部で行っているために、残念ながら、この3専攻の研究室所在地は、分散を余儀なくされています。かろうじて現在、「環境総合館」という共通の研究・事務棟が確保され、教授会等の会合はこの建物で行われます。設備の点など諸般の事情を考慮して、日中社会学会第21回大会は、この環境総合館をメイン会場として開催することにしました。何かとご不便をおかけするのではないかと恐れておりますが、どうかこのような事情をご賢察の上、ご寛恕いただければ幸いです。

さて現在、私どもの社会学講座には、中国からの留学生だけでも、研究生等も含め10名を超えます。これまでに学位を取得し中国の大学教員になった者もおります。これから大学院を目指そうとする学部の中国人留学生もいます。留学生30万人計画が現在進行中で、今後さらに留学生が増えると予想され、大学の国際化が求められているわけですが、研究・教育の質を落とさずに、いかに大学の扉を諸外国に開いていくのかが、いまわれわれに問われています。

私見ではありますが、日本の大学は、大学院レベルではだいぶ変化してきたとはいえ、まだまだ諸外国に閉ざされた状態にあります。否、大学だけでなく、日本全体が、外国人労働者等の問題を考えてみれば分かるように、閉ざされた状態にあります。第二の開国の必要性が語られるゆえんです。こうした一種の閉塞状況を、政財界に任せておくのではなく、学会が率先して打ち破り、日中、あるいはアジアの連携を模索することも重要な課題だと思われま。日中社会学会の伝統は、まさに、そのさきがけとなるものです。国境を超えた学術交流を目指す日中社会学会大会の開催に、私どもも微力ながら協力させていただきたい、と考えている次第です。
(文責・西原和久)

〈第 21 回大会開催要項〉

日時：2009年6月6日・7日
会場：名古屋大学環境総合館1階
 レクチャーホール
参加費：一般 2,000円
 学生 1,000円
 非会員 1,000円
懇親会費：5,000円（一般）
 2,000円（学生・退職者ほか）
懇親会会場：レストラン花の木
 (052-783-8707：大会会場のすぐ
 近くです。)

■日中社会学会第 21 回大会 開催校の連絡先

(黒田由彦)
464-8601 名古屋市千種区不老町
 名古屋大学情報文化学部
 黒田由彦研究室
メールアドレス：
 f43839a@cc.nagoya-u.ac.jp
電話 052(789)3507
Fax 053(789)4821

■大会担当実行委員の連絡先

(西原和久)
464-8601 名古屋市千種区不老町
 名古屋大学文学部
 西原研究室
メールアドレス：
 n47178a@cc.nagoya-u.ac.jp
電話/FAX 052(789)2273

■第 21 回大会 論著資料の配布コーナー 及び書籍販売コーナー設置のお知らせ

首藤明和（事務局）

大会参加者相互による論著資料の配布コーナー（受付付近）を設置します。

是非、論文、研究報告書など、お手元にある論著資料をご持参ください。論著資料は、抜刷、コピーどちらでもかまいません。設置コーナーにて配布していただきます。

また、会員諸氏の著書などをそれぞれ持ち寄っていただき、販売する、書籍販売コーナーも設置します。情報交換や研究成果のアピールの場として、この機会を是非、ご利用ください。

■第 21 回大会 中国の大学・中国の研究 機関紹介コーナーなど設置のお知らせ

首藤明和（事務局）

中国の大学・中国の研究機関の紹介コーナーを設置いたします。中国の大学・研究機関に関する資料やコピーなどを、みなさまから持ち寄っていただき、学会参加者のあいだで情報交換することを目的とします。海外を活動拠点とする「在外会員」との研究者ネットワークの構築や留学先の情報収集など、幅広い研究者・研究交流のきっかけとなることを願っております。

また、若手研究者の自己アピール、他学会の紹介、中国・欧米の研究動向の紹介などに関する資料配布コーナーも設置します。ご希望の方は大会当日、関係資料を持参の上、当コーナーにて展示、配布するなど、各自ご利用ください。

日中社会学会第21回大会プログラム

開催日：6月6日（土）・6月7日（日）

会場：名古屋大学環境総合館レクチャーホール

（注）プログラムは一部変更となる場合があります。
当日会場にて配布される資料でご確認ください。

第1日 6月6日（土）

12:00～ 受付

13:00～13:05 開会式

会長挨拶 中村則弘（愛媛大学）
司 会 首藤明和（兵庫教育大学）

13:10～15:10 特別講演

「マックス・ヴェーバーの比較歴史社会学における欧米とアジアとくに中国」

講 演 折原 浩（東京大学名誉教授）
司 会 西原和久（名古屋大学）

15:30～17:50 シンポジウム PART1 「新しい段階に入った日中交流の現在」

報告者

林 麗（中国大使館参事） 「日中関係の現在」
西原和久（名古屋大学） 「長野県八ヶ岳東南麓の外国人研修生
——日中／アジアへの新しい視点——」
南 誠（日本学術振興会・民族学博物館）
「日中関係と『中国帰国者』——『中国残留日本人』の
過去、現在と未来を手掛りに考える——」

コメンテーター 浅野慎一（神戸大学）
司 会 黒田由彦（名古屋大学）

18:00～20:00 懇親会

受付の近くにて

- 論著資料の配布コーナー（論文の抜刷やコピー、調査報告書などの配布）
- 書籍販売コーナー（著者割引での販売など）
- 中国の大学・研究機関紹介コーナー（資料やコピーなどを置いておく）
- その他（若手研究者の自己アピール、他学会の紹介、中国・欧米の研究動向の紹介など）

第2日 6月7日(日)

9:00～ 受付

9:30～12:00 一般自由報告

司会 首藤明和(兵庫教育大学)

- 1) 鄭 南(中部学院大学)
「中国におけるキリスト教の発展と社会福祉—撫順のあるキリスト教会を事例として」
- 2) 李明伍(和洋女子大学) 「『顔』論的アプローチの意義と課題」
- 3) 梁 萌(名古屋大学)
「日本人論の受容と批判—現代中国知識人における対日意識の一断面」
- 4) 宮内紀靖(瀋陽師範学院) 「中国社会の変遷と将来」

13:00～13:40 総会

13:50～17:10 シンポジウム PART2 「日中社会学叢書の成果・課題・展望」

司会 永野 武(松山大学)

はじめに) 日中社会学叢書についての紹介
監修者代表: 中村則弘(愛媛大学)

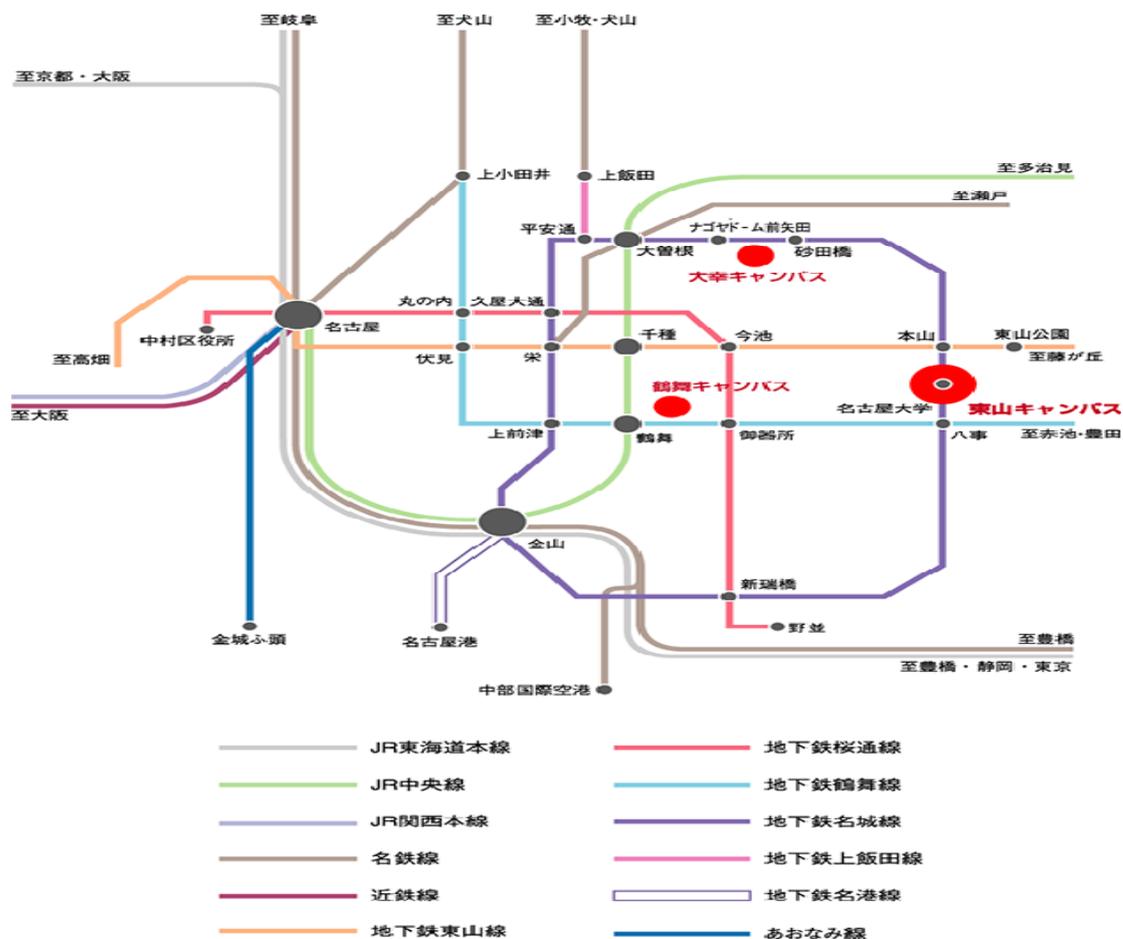
- 1) 中村則弘編『脱オリエンタリズムと中国文化』
評者: 首藤明和(兵庫教育大学)
王 向華(香港大学)
- 2) 石井健一・唐燕霞編『グローバル化における中国のメディアと産業』
評者: 本田親史(明治大学・法政大学)
田中重好(名古屋大学)
- 3) 黒田由彦・南裕子『中国における住民組織の再編と自治への模索』
評者: 陳 鳳(姫路獨協大学)
長田洋司(早稲田大学)
- 4) 首藤明和・落合恵美子・小林一穂編『分岐する現代中国家族』
評者: 金戸幸子(京都大学)
鈴木未来(新潟福祉医療大学)
- 5) 袖井孝子・陳立行『転換期中国における社会保障と社会福祉』
評者: 賽漢卓娜(名城大学・豊田地域看護学校)
松戸庸子(南山大学)

おわりに) 監修者による全体的なリプライ

17:10～17:20 閉会挨拶

大会担当理事 浅野慎一(神戸大学)・西原和久(名古屋大学)
大会実行委員 黒田由彦(名古屋大学)・西原和久(名古屋大学)

■会場（名古屋大学・東山キャンパス）へのアクセス



名古屋駅からは、下記の2つの方法があります(栄付近に宿泊の場合は、②が便利です)

- ①地下鉄東山線→(15分で)「本山」駅・地下鉄名城線(右回り)に乗り換え
→(3分で)「名古屋大学」駅着
- ②地下鉄東山線→(5分で)「栄」駅・地下鉄名城線(右回り)乗り換え
→(約20分で)「名古屋大学」駅着

「名古屋大学」駅は大学のキャンパスの真ん中にあります。「名古屋大学」駅に着いてからは、2番(No.2)の出口に出て、本山方面(北方向)に3,4分歩きます。途中すぐに、「名古屋大学内郵便局」があり、そこから2本目のコーナーを右折し、緑の林の中の少し上り坂の道を3分ほど、歩きます。そして右手に「環境総合館」入り口があります。(なお、エスカレーター・エレベーターをお使いになりたい方は、3番出口から出られますが、道路を渡る必要があります。)

下記のキャンパス地図では、「47」の建物が「環境総合館」です。

↓ 47 : 環境総合館 (㊟は懇親会場)



■ホテル

名古屋大学のすぐ近くには、残念ながら、ホテルがありません。

比較的近くでは、

- 名古屋大学駅から2駅の「八事（やごと）」駅に直結する
「サーウィンストンホテル」(052-861-7901)がありますが、少し高めです。
- 名古屋駅から本山乗り換えになりますが、千種区には、地下鉄東山線の
「池下駅」近くのルブラ王山(052-762-3151)、および
「千種（ちくさ）駅」近くのメルパルク名古屋(052-937-3535)がリーズナブルです。

しかし、「栄駅」周辺（および「伏見駅」）には、各種のたくさんのホテルがあります。各会員の好みや予算に応じて選ぶことができます。また時間的にも、栄駅から名古屋大学駅までは、地下鉄名城線を使えば、直通で約20分（260円）で着きます。

もし、ホテルが見つけない場合には、大会実行委員宛にご連絡下さい。

首都経済貿易大学主催・日中社会学会後援

2009 年度秋季・国際学術シンポジウム開催のお知らせ

「中日経済与社会発展問題論壇」

理事・陳捷（愛媛大学）
事務局・首藤明和（兵庫教育大学）

首都経済貿易大学主催・日中社会学会後援により、2009 年 9 月 12 日、北京の首都経済貿易大学において、国際学術シンポジウムを開催します。

○主催・後援

- ・首都経済貿易大学（金融学院）主催 日中社会学会後援

○開催日時

- ・2009 年 9 月 12 日（土曜日）

○開催場所

- ・首都经济贸易大学（中国・北京）

○シンポジウムの内容

- ・日中の比較の視点から、「経済と社会」の新たな発展モデルを探究する。
具体的なトピックとして、経済と金融、市民社会、グローバリゼーションのなかの経済と社会、移動（ひと・もの・情報等）等

○論文提出の期日

- ・2009 年 6 月 30 日

○報告者の募集（若干名）（2009 年 6 月 10 日まで）

- ・報告者を若干名、募集いたします。下記の項目について、事務局（首藤）までご連絡ください。
 - ・氏名と所属
 - ・報告題目（仮題でもかまいません）
 - ・報告要旨（1200 字程度）

今後、本シンポジウムの詳細については、ニューズレターや学会 HP にて広報します。
また、ご不明な点などございましたら、事務局（首藤）までお問い合わせください。

2009年3月27-28日の2日間にわたって、中国・中央民族大学（民族学与社会学学院）、中央民族大学“985工程”民族发展与民族关系问题研究中心、日中社会学会の共催で、国際学術シンポジウム「中国研究の可能性と課題——新しい社会構想の実験場として」（「中国研究的可能与課題——中日社会学学术研讨会」）を開催しました。日中社会学会としましては、海外で初の研究集会となりました。シンポジウム開催にあたって多大なご尽力を賜りました中央民族大学の包智明先生をはじめ、艾斌先生、朴光星先生、そのほか多くの関係者の皆様、並びに、シンポジウム当日、中国、日本、香港など各地からご参集賜りました皆様に心よりお礼申し上げます。以下に、シンポジウム組織委員のお名前、シンポジウムプログラム等について、会員のみなさまにご報告申し上げます。また、シンポジウムについて、多くの方々からご感想をいただきましたのでご紹介いたします。当日の熱気や、今回のシンポジウムが持つ今後の意義などについて、皆様にお伝えできたらと思います。

「中国研究的可能与課題」研讨会组织机构

主办单位

- ・中央民族大学民族学与社会学学院社会学系
- ・日本 日中社会学会
- ・中央民族大学“985工程”民族发展与民族关系问题研究中心

组委会成员

- 杨 圣敏 中央民族大学民族学与社会学学院院长、教授
中村则弘 日中社会学会会长、日本爱媛大学教授
白 振声 中央民族大学“985工程”
民族发展与民族关系问题研究中心主任、教授
包 智明 中央民族大学社会学系主任、教授
首藤明和 兵庫教育大学副教授
艾 斌 中央民族大学社会学系副教授

会务组成员

- 组长：艾 斌 中央民族大学社会学系副教授
朴光星 中央民族大学社会学系副教授
成员：杨素雯 中央民族大学社会学系研究生
金 晶 中央民族大学社会学系研究生
刘彩霞 中央民族大学社会学系研究生
牛玉西 中央民族大学民族学系研究生
杨文妍 中央民族大学民族学系研究生
于 游 中央民族大学民族学系研究生
金彦龙 中央民族大学民族学系研究生
贾英仙 中央民族大学民族学系研究生
刘天骄 中央民族大学民族学系研究生
赵元元 中央民族大学民族学系研究生
简娜古丽·阿木提 中央民族大学社会学系研究生

会议日程安排

2009年3月27日（星期五）上午

开幕式（8:30—8:50）

主持人	包智明（中央民族大学社会学系主任、教授）
致辞	白振声（中央民族大学“985工程” 民族发展与民族关系问题研究中心主任、教授） 中村则弘（日中社会学会会长、爱媛大学教授） 郑杭生（中国社会学会名誉会长、中国人民大学教授） 陈立行（日本福祉大学教授）

主题演讲（8:50—10:00）

主持人	任国英（中央民族大学社会学系副主任、教授）	
演讲	演讲人	题目
	郑杭生（中国社会学会名誉会长） 中村则弘（日中社会学会会长）	对“中国经验”的几点探讨 摆脱东方主义与中国社会——全球化 与东亚社会的新构想

专题 I（10:10—12:00）

主持人	艾斌（中央民族大学副教授）	
评议人	徐平（中共中央党校教授） 陈立行（日本福祉大学教授）	
发言	发言人	题目
	东美晴、根桥正一 （流通经济大学教授） 张玉林（南京大学教授） 永野武（松山大学副教授） 朴光星（中央民族大学副教授）	中国の移動に関する研究の現状 “天地异变”与中国农村研究 中国性与跨国性的认同 中国的跨国移民研究

2009年3月27日（星期五）下午

专题II（13:30—15:20）

主持人	姚丽娟(中央民族大学教授)	
评议人	阮云星（浙江大学教授） 石井健一（筑波大学副教授）	
发言	发言人	题目
	陈立行（日本福祉大学教授）	中国从社会福利向社会福祉跨越发展的路径探索
	冯喜良（首都经贸大学教授）	新形势下中国企业劳动争议发展特征研究
	合田美惠（香港中文大学讲师）	香港资优教育的现状和课题
	艾斌（中央民族大学副教授）	城市老年人健康自我评价对生命预后预测有效性研究

专题III（15:30—17:20）

主持人	黒田由彦（名古屋大学副教授）	
评议人	张玉林（南京大学教授） 长田洋司（早稻田大学助教）	
发言	发言人	题目
	首藤明和（兵庫教育大学副教授）	出现分歧的现代中国家族—个人和家族的再编成》
	何俊芳（中央民族大学教授）	中国的族际通婚家庭及其子女的民族认同
	赛汗卓娜（名古屋大学）	中国媳妇在日本农村的“移民物语”
	阮云星（浙江大学教授）	乡村社区文化中的民间信仰如何定位

2009年3月28日（星期六）上午

专题IV（8：30—10：20）

主持人	永野武（松山大学副教授）	
评议人	邱泽奇（北京大学教授） 首藤明和（兵庫教育大学副教授）	
发言	发言人	题目
	徐春陽、黒田由彦（愛知大学講師、名古屋大学副教授）	現代中国の都市における社会的調整メカニズム
	张建平（中央民族大学教授）	中国農業政策の転換と課題
	长田洋司（早稲田大学助教）	城市基层管理体制的改革和现状
	良警宇（中央民族大学教授）	旧城拆迁改造对大城市少数民族聚居区的影响——以北京牛街为例

专题V（10：30—11：50）

主持人	张建平（中央民族大学教授）	
评议人	冯喜良（首都经贸大学教授） 东美晴（流通经济大学教授）	
发言	发言人	题目
	牧野厚史、杨平（滋贺县立琵琶湖博物馆专门学艺员、滋贺县立琵琶湖博物馆学艺技师）	东亚湖泊环境问题的社会学比较的可能性
	张曦（中央民族大学副教授）	観光開発と地域社会における伝統文化の動態保存
	石井健一（筑波大学副教授）	中日动画片的内容与收视行为的比较研究

闭幕式（11：50—12：00）

主持人	根桥正一（流通经济大学教授）
总结发言	包智明（中央民族大学社会学系主任） 中村则弘（日中社会学会会长）

これからの『路』づくり』に向けて

中村則弘 (愛媛大学)

時代は、われわれの取り組みを待ち望んでいると実感した。時代の扉を、われわれは一つ開いたのも知れない。ただ、これからの責任も重い。

日中社会学会の長年にわたる目標であった研究集会の「中国での、中国との協力のもとでの開催」を実現することができた。これまで少なからぬ研究集会・シンポジウムを主催したり、それに参加したりしてきたが、このたびは別格であった。充実感といい、知的感動といい、これまでにない経験だった。「成功裏に閉幕した」と片づけるのが、あまりに惜しい。

まずもって、組織委員会のメンバーである中央民族大学の楊聖敏院長・教授、白振声主任・教授、包智明教授、艾斌副教授に、運営に携わられた朴光星副教授および包教授、艾教授をはじめとする同大学社会学系・民族学系の先生方に、そして、協力された中国国内各大学の先生方に深くお礼を申し上げたい。また、中央民族大学の学生さんたちにも感謝の意を表したい。

故福武直先生、故安原茂先生、青井和夫先生、宮城宏先生、石川晃弘先生、塩原勉先生、根橋正一先生そのほか、日中社会学会を支えてこられた先生方にも、あわせて心からのお礼を申し上げたい。この開催は、これまでの先生方の交流蓄積の上に、始めて実現できたものだからである。ささやかなトピックをお伝えしておこう。包先生が始めて日本とのかかわりを持たれたのは、1984年の日中社会学会の訪中団との交流であった。そのときの思い出を、先生はいまだに昨日のこのように語られておられた。その時、先生は20代前半の北京大学の大学院生であった。訪中団の代表は故福武先生だった。他の多くの先生方に

とつても、なつかしい思い出は尽きないようであった。本学会のこれまでの交流活動が、いま花を咲かせ、実をつけつつある。

さて、研究集会・シンポジウムは、3月27日と28日の両日、中央民族大学大講堂で開催された。中国側の基調講演は、人民大学教授・中国社会科学会会長の鄭杭生先生が行われ、これから刊行予定の新たな研究内容を、特に報告していただいた。また、「中央民族大学985工程」を代表して白振声先生からは、心強い励ましの言葉をいただいた。

プログラムなどの報告は別稿に譲ることとし、ここではいくつかの思いついた点を記しておきたいと思う。まず、報告と討論についてである。

第一に、中国側から第一線の研究者が参集し、実に興味深い報告が続いたことをあげておきたい。南京大学の張玉林先生、浙江大学の阮云星先生、首都経済貿易大学の馮喜良先生から、また艾斌先生、朴光星先生、何俊芳先生、張建平先生、良警宇先生、張先生から

行われた、環境異変と農村、高齢者の自己評価、労働と争議、越境・結婚とエスニシティ、都市とエスニシティ、民間信仰とコミュニティ、環境問題、観光と伝統文化などについての報告は、いずれもが学問的に刺激的であった。また、報告すべてが、しっかりとした実証研究に基づいていたことも印象に残っている。

なお、これらの先生方は中国社会科学会の第一線で活躍されているとともに、日中社会学会の元会員の方も多し。われわれにとっては、懐かしい顔ぶれでもあった。少し貫禄が出た方もおられたが。

第二に、報告、討論の内容が日中双方で噛み合っていたことである。これには驚いた。正直なところ、日本側報告と中国側報告がばらばらになるのではないかと、討論内容が双方ですれ違いとなるのではないかと懸念してい

たからである。少なからぬ国際シンポジウムや国際研究集会で、たびたび体験するからでもある。しかし、今回は異なっていた。別稿に掲載されるはずの報告タイトルを確認していただきたい。どれが日本側か、どれが中国側か区別がつかないと思う。加えて、日本側が中国語を使って報告したり、中国側が日本語を使って報告したりしている。そこでは、国民、異文化の障壁などと言われているものは、簡単に乗り越えられている。

討論についても同様であった。的確な質問と返答が続いたことは鮮明な記憶に残っている。国際研究集会などで目にしがちな、歯痒いようなやりとりは、まったくなかった。あわせて、中央民族大学の学生からよい質問が多数出されたことも特に記しておきたい。これは、同大学スタッフの学生教育の水準の高さを物語っている。

ここで大事なことは、問題関心や分析視角が日中共に噛み合っていたことに尽きていると思う。これまでの日中双方の研究交流の成果の一端は、すでに結実しているのである。トランスナショナルな活動に向けての、もっとも重要な基盤は、もはや形成されているのである。

つづいて、運営面についてである。今回の運営は見事というほかなかった。中央民族大学のスタッフの協力体制、「985 工程」による支援などの諸手配も万全だった。また、臨機応変の対応にも抜かりはなかった。

なぜこれだけの運営ができたのかということに、どうしても考え及んでしまう。もちろん、包智明先生、艾斌先生らのご尽力の大きさは間違いない。それと同時に、中央民族大学のスタッフの雰囲気の良いがあったのではないだろうか。ここで思い当たることがある。それは、同大学のスタッフには出身、研究テーマなどで少数民族にかかわる方々が多いことである。多元社会、多元文化の持ち味が、同大学のスタッフの協力の在り方に体现され

ていたような気がしてならない。そういう意味で今回の運営は、来るべき時代を先取りしていたといえるのかも知れない。

何はともあれ、教員各々と学生各々が思いを共有しつつ協力し合う、清々しい姿を垣間見た気がしている。ひるがえって、大学改革の名のもとに、こうした清々しさを破壊してきた例を多く目にする日本の状況には、一抹の悲壮感すら覚えている。

研究集会・シンポジウムの全体総括では、日中双方から大変意義深いものであったとの極めて高い評価が示された。それに対応して、日中社会学会にとっての課題も示されることとなった。

まず、オリンピック方式で、4年に一度の定期開催が提起されたことである。将来に向けた展開を考えると、これはすばらしいことである。これらから本学会の理事会、総会での討議が必要となることはいうまでもない。ただ、この提案を全く反故にするというのは、われわれの「信義」にかかわる問題となってしまう。もし何らかの形で開催するとなると、つぎは日本側での運営となる。われわれの「鼎の軽重」が問われる取り組みとなるだろう。

つづいて、広報体制の充実である。これだけの成果をあげたシンポジウムである以上、積極的な広報を考える必要がある。今回の成果、これからの取り組みは、間違いなく日本の、中国の国際学術交流にも一石を投じるものである。もしかすると、そのような「燕雀」レベル話ではないかも知れない。これまで「国際学術交流」と称されてきたものそのもの意義を問いかけるものとなってよいはずである。あわせて、学術論文の相互刊行をさらに活発化する必要も痛感している。われわれとしては、さしあたり雑誌「21世紀東アジア社会学」がその受け皿となろうか。

主要な課題に限定して簡単に記したが、それ以外のもの、またそれに関連するものは数知れない。とにかく、この全体総括を受けて、

われわれにとって新たな課題が山積みとなったことは間違いない。

最後になったが、日本から参加された、首藤明和先生はもとより、東美晴先生、根橋正一先生、永野武先生、陳立行先生、合田美穂先生、賽汗卓娜先生、徐春陽先生、黒田由彦先生、長田洋司先生、牧野厚先生、楊平先生、石井健一先生に衷心よりの謝意を表したい。中央民族大学との日程調整上、今回の開催は3月27日、28日という年度末の大変な時期となってしまった。この時期に海外へ渡航するのは、何かと大変である。そのご苦労は、何より理解しているつもりである。さすがこの時期に参集されただけのことはあり、各先生方の報告はいずれも意義深い内容であった。シンポジウム終了後の中国側スタッフとの話からみて、かなりの学術的インパクトを与えたことは間違いないようである。先生方の苦労は、思いは、十二分に報われたと断言できる。

われわれの責任は重いと最初に書いたが、実際のところ、これからの取り組みに困難が多いことは想像がついている。また、トランスナショナルな交流の実現は希望や夢に終わるのかもしれない。大事なことは、これからの努力の積み重ね以外にはない。この報告をしめるにあたり、魯迅の言葉が思い浮かんでならなかった。

我想、希望是本無所謂有、無所謂無的。這正如地上的路、其實地上本沒有路、走的人多了、也便成了路。(魯迅、故郷より)

時代が求めている「路」を、しっかりとつくり、踏み固めてゆきたいものである。会員各位の協力を切にお願いしたい。あわせて、これらからの時代を担う若手会員各位の奮起を期待したい。

日中社会学学術交流の新しいモデル

——「中日社会学学術研討会」を主催して

包 智明（中央民族大学社会学系教授）

北京の中央民族大学で行われた「中日社会学学術研討会」が閉幕してから、既にひと月あまりが過ぎましたが、いまだにシンポジウムでのさまざまな情景が目の奥に鮮明に残っております。私は中国側主催者である中央民族大学社会学系の責任者として、シンポジウムの計画・準備から閉幕までの全ての過程にかかりました。中日双方の主催機関各位の協同と、中国、日本からご参集いただいた社会学者各位の積極的な協力のもとで、シンポジウムは大成功を収めることができました。非常に印象深く、忘れ難いシンポジウムになったと言えるでしょう。シンポジウム終了後、多くの先生方から次々とお便りをいただいたなかで、この度のシンポジウムに対する高い評価をたくさん頂戴しております。「これまで参加したシンポジウムのなかで一番素晴らしい！」「出色だった、忘れ難い思い出になった！」など等……。1回のシンポジウムでこれほどの高い評価をいただくようなことは、なかなか容易なことではありません。

実のところ、中央民族大学では毎年、数多くのシンポジウムを開催してきましたが、今回のシンポジウムはこれまでのものとは異なる特徴を持っています。第1に、政治色の一切無い、純粋な学術シンポジウムだったということです。この手のシンポジウムでは、大学の指導者及び大学関係部門の責任者が出席して話しをするのが一般的です。しかし、今回は行いませんでした。シンポジウムでの報告、コメント、議論は全て、研究者によって行われました。大学指導者・関係者の長い講話を省略したことで、開幕式は20分足らずに収まり、その後の学術討論により多くの時間を割

くことができました。第2に、中日双方の平等な協力と交流の理念を実現したことです。開幕式、閉幕式、主題講演、各セッションの司会者・報告者・コメンテーター等の人選において、中日双方の割り当ては、完璧に近い“平等”を実現しました。開幕式では中国側が司会者を、閉幕式では日本側が司会者を務めました。また、開幕式では、ふたりの中国側研究者とふたりの日本側研究者の報告が行われました。主題講演も中日双方ひとりずつの報告でした。さらに、5つのセッションについて言えば、計19人の報告者のうち中国側9人、日本側10人、5人の司会者のうち中国側3人、日本側2人、10人のコメンテーターのうち中日それぞれ5人といったような形で、各々の役割を務めました。開幕式においてさえも、中日でひとりずつ総括の言葉を述べました。第3に、学生が積極的に参加したことです。この度のシンポジウムに企画、準備、運営、報告などで正式に関わった方々は43名でしたが、当日、200名を収容するシンポジウム会場は、満員の学生たちで常に埋め尽くされていました。学生たちは、真剣に耳を傾けているだけでなく、積極的に発言や質問をしました。そこで出された質問や議論の内容の深さに、中日双方の研究者は驚きを禁じ得ませんでした。

総じて言えば、この度のシンポジウムにおける学術交流の方法は、中日合作の方法として、また、教員と学生の共同参加の方法として、ひとつの新しい試みとなりました。今後の中日社会学の学術交流に対して、ひとつの成功経験と、ひとつのモデルを提供することができたとと言えるでしょう。

開幕式での中村則弘日中社会学会長は、この度のシンポジウムによって、日中社会学会の長年の夢であった海外での学術シンポジウム開催が実現したというお話をされました。それは、私自身にとっても長年に渡る願望でありました。1988年、私は北京大学の社会学

教員として、日中社会学会訪中代表团との交流会に参加しました。この交流会を通じて、私は根橋正一教授や中村則弘教授その他大勢の日本社会学者と知り合いになりました。私にとって、このときが初めての日本の研究者との交流になりました。その後、20年あまりが過ぎました。私の学術上での成長は、常に、日本の研究者との交流と共にありました。中国国内での日本の研究者との共同研究だけでなく、日本の大学での研究や仕事は7年もの長きに渡りました。中国での社会学が再開されて間もない頃、まだ大学での社会学教育が整備されていなかったあの年代において、日本で研究し、また、日本の研究者と交流する機会が得られたことは、その後の私の学術上での成長にとって、たいへん重要な意味を持ちました。私は、日中学術交流の受益者として、より一層多くの方々が、私と同様に、日中学術交流からさまざまなものが得られることを望んでいます。現在の私は、こうした願望を実行に移すための条件が揃いつつあります。ここ数年、私は学生たちを日本に留学させる一方で、日本の研究者を中央民族大学に招聘し、講義をしていただいております。同時に、中央民族大学において、日本の学術界の仲間と一緒に学術シンポジウムを開催することを、ずっと希望しておりました。去年6月、流通経済大学で開催されました日中社会学会第20回大会において、こうした私の願望を申しあげましたところ、すぐさま、中村則弘会長と事務局長の首藤明和准教授が、積極的に応じてくださいました。また、去年9月には、中村教授、首藤准教授の一行が中央民族大学を訪問され、正式にシンポジウム開催を決定しました。そして、今年3月27日から28日にかけて、このシンポジウムの開催に至ったわけです。

この度のシンポジウムによって、私の長年に渡る願望は実現したわけですが、しかし私は、更に多くのことを望んでおります。すな

わち、この度のシンポジウムが、日中社会学会と中国社会学者との、密接な協同と交流の新しい起点となることを強く望んでおります。

今後、日中社会学会の仲間と中国の社会学界の仲間との交流と協同が、ますます深まり、ますます広まっていくことを、私は、固く信じております。(2009年5月10日)

中日社会学学術シンポジウム感想

艾 斌 (中央民族大学)

今春、北京は特に晴れ渡っています。日中社会学会と中央民族大学の共同主催による“中国研究の可能性と課題”社会学シンポジウムは、3月27日、28日に北京で無事に開催されました。今回、参会者各位から積極的なご協力をいただき、中日双方の学者たちが最新の学術成果を発表してくださったことで、今回のシンポジウムがこのように高い効果と豊富な成果を得、十分模範的な協同の形となったことに、私は大会の幹事長として、心より感謝申し上げます。

2008年、秋風がオリンピックの時の酷暑を吹き飛ばし、目の覚めるような清々しさをもたらした時期、党と政府および学術界は、1978年から2008年までの改革開放30年の中国が歩んできた道程に全体的な総括と深い再認識を始めました。そして、ちょうどその時、中央民族大学社会学系主任の包智明教授が、北京を訪れた日中社会学会の中村会長と首藤先生の一行をもてなしました。我々の話題は、中国社会の变革と存在する問題へと自然に転じました。その時、包智明教授は、日本への留学・研究の経験を持っている中国人学者と中国への留学・研究の経験を持っている日本人学者が、この課題について、より多くの観点や発見をもちうるものであるかどうかを共に議論することを提案しました。さらに、中

村会長と首藤先生も、研究視点を限定せず、より多くの領域の学者を最大限招いて共に議論することを提案し、さらに“中国研究の可能性と課題”という包括性の高いテーマを提起しました。

もし、各学者たちの発表が夜空に輝く星であると言うならば、シンポジウムの基調講演は一本の主線でありました。即ち、前中国社会学学会会長である鄭杭生教授の“中国経験の解説”と日中社会学会会長である中村教授の“中国研究の再構築”が、一見バラバラな光の点を結びつけたのです。そうして、日本福祉大学、流通経済大学、筑波大学、早稲田大学、愛媛大学、兵庫教育大学、名古屋大学、松山大学、滋賀県立琵琶湖博物館、香港中文大学、南京大学、浙江大学、首都経貿大学、北京大学、中国人民大学、中共中央党校、中央民族大学など17の大学と研究組織から来た学者たちが、中国の農村、都市、福祉、労働、教育、高齢者、社区、家庭、婚姻、文化、移民、生態などについて報告を行いました。

一日半という短い時間でしたが、数百人が参加したシンポジウムは整然と秩序を保ち、8つのセッションはスムーズに進行し、48人の発表・コメントは適度に時間調整がなされました。また、こうしたシンポジウム期間中の対応だけでなく、運営グループに携わった10数名の修士学生たちは、一ヶ月に渡って懸命な準備と繰り返しのリハーサルを行い、その功績は計り知れません。同時に、聴衆として参加した学生たちの高い熱意と率先して質問をする様子によっても、シンポジウムはその輝きを大いに増し、私に深い印象を残してくれました。学生の成長や独立、そして学生の研究に対する深い理解を目の当たりにすることは、我々教師をしている人間にとって最も誇りに感じる事なのでしょう。

松山の桜の花が満開になったことを、シンポジウムが閉幕して日本に戻ったばかりの中村会長がメールで知らせてくれました。中日

両国の学者たちによる懸命な努力と真心こもった交流が必ず実を結び、継続していくことを固く信じています。

中国研究の可能性と課題

——中日社会学学術シンポジウム

陳 立行（日本福祉大学）

2009年3月27日－28日『中国研究の可能性と課題—中日社会学学術シンポジウム』が中国中央民族大学において、中央民族大学社会学系・「985プロジェクト」民族発展と民族関係問題研究センター・日中社会学会によって共同開催された。中国各地から20人、日本から13人、香港から1人の社会学者が研究発表を行った。

このシンポジウムでは、中国社会学会名誉会長・中国人民大学教授、鄭杭生先生は「中国の経験について」、日中社会学会会長中村則弘教授は「脱オリエンタリズム—グローバル化における東アジア社会の新構想」という基調講演を行った。二人の基調講演では、昨年起きた世界金融危機は冷戦終焉以降20年の間、新自由主義が主導した資本主義の市場経済の暴走の結果だと指摘した。これは社会学者に学問の物差しとなった欧米的モデルのグローバル化の限界を呈し、今後の中国研究や、さらには東アジア研究に対して、独自の視点と独自の価値の重要性を提起した。

このシンポジウムでは、「移民と移動」、「福祉と権利」、「家族の変化」、「都市社区」、「環境と文化」という5つのテーマセッションを設け、合計20本の研究発表が行われた。それぞれのセッションでは司会、発表者、コメントーターが全て中日の学者によって均等に担当され、意義深い議論が行われた。

私は1991年UNCRD勤務の時代から、20年間近く中国国内研究者との共同研究、シン

ポジウムの開催などを行ってきたが、今回のシンポジウムを通じて中国社会科学の現場に大きな変化を感じた。

まず、中国のエリート大学生が社会問題に対して強い関心を持っていること。これまで、中国でも、日本でも学術シンポジウムにおいて論文発表者以外、参加者には関連分野の研究者と専門家がほとんどで、学生が少なかった。中国の研究者と議論した場合、どうしてもかみ合いが悪く感じるものが度々あった。ところが、このシンポジウムは同時通訳で進められ、200人の会場は聴衆でいっぱいになった。発表者と会議関係者約40人以外全て中央民族大学や付近の大学の学生のようなのである。発表した内容に対するフロアからの質問のレベルが非常に高く、討論のかみ合いは非常に良かった。中国の大学生の学問に対する探求と日中両国に関わる共通の社会問題に対する大きな関心と強い意欲を感じ、大学における社会科学の教育内容の変化も伺われた。

そして、中国人研究者の学術研究レベルの向上。これまで、中国の社会科学の分野ではさまざまな統制によって、学問の研究水準の向上に影響が及び、学術論文には、政府の政策の賛美と評価の内容が多かった。ところが、このシンポジウムでは、大学当局や共産党の有力者の挨拶の代わりに、日中両国の社会学会の代表と学者の代表によって挨拶がなされ、いきなり中国社会やアジア社会に潜む問題と可能性に挑戦しなければならないと提起された。中国国内研究者が発表した論文の内容にも環境破壊、政策批判などの敏感な問題もあり、問題の提起、調査の方法、解析の結果などのレベルも大きく前進し、日本から参加した研究者に大きな刺激を与えた。

このシンポジウムを通じて、改革以降、日本と中国の社会学分野の交流が大きく実ったことを感じた。今回のシンポジウムは日中社会学会としてはじめて中国の大学と共同で開催された国際会議である。企画者、論文の発

表者、司会者、コメンテーター、同時通訳の80%以上が日本から帰国した中国人留学生である。会議の企画、事前準備、時間の管理、同時通訳のレベル、すべて専門的国際会議としてすばらしいチームワークの下で達成された。彼らには、中国人の持つ活発な発想と日本の大学や職場で身につけた精確さと完璧さを求める精神が共に見られた。このシンポジウムを通じて、これまでの日本と中国の間における相互の人的交流が、今後、共生的東アジア社会の構築に大きく貢献できるものと確信した。

シンポジウム参加記

石井健一（筑波大学）

北京の中央民族大学で3月27日と28日に日中社会学会と中央民族大学民族学与社会学学院社会学系の共催のシンポジウム「中国研究的可能与課題」があり、私も参加してきました。日本・中国側の双方から合計20本の研究発表がありました(発表題目リスト参照)。発表の本数では日本側と中国側がほぼ半半ずつで(日中の同時通訳付き)、朝8時から夕方5時過ぎまで発表が続きました。一つのセッションでは4人の発表を連続して行い、続いて日中の評議人(コメンテーター)が発表内容に対するコメントをし、会場からの質問に発表者が答えるという形式で行われました。日中社会学会側から参加した発表者は以下の方々です。中村則弘、東美晴、根橋正一、永野武、陳力行、合田美穂、首藤明和、賽汗卓娜、徐春陽、黒田由彦、長田洋司、牧野厚、楊平、石井健一(発表順、敬称略)。

さまざまな分野の内容の発表があり、私も評議員としてコメントするときには少し面喰いしましたが、日本と中国の社会学の交流という点では意義が深かったと思います。



中央民族大学は北京市の中関村にあり教員のほとんどが少数民族というユニークな大学です。発表の後は昼食と夕食に招待されましたが、色々な少数民族料理を堪能しました。写真は最後の日の晚餐会で御馳走していただいたモンゴル料理の様子です。手前に酒盃がたくさん並んでいるのが見えると思いますが、晚餐会では「蒙古王」という強烈な酒の乾杯がいつ終わるともなく繰り返され、夜更けまで歓談が続いたと聞いています(私はついでいけず先に失礼したため、実際に最後までいたわけではないですが)。包先生や艾先生を始めとする中央民族大学民族学与社会学学院の皆様方からの歓迎に厚く感謝の意を表したいと思います。



19年ぶりの中央民族大学

——国際学術シンポジウム「中国研究の可能性と課題」大会参加記

合田美穂

(香港中文大学歴史学系兼任助理教授)

2009年3月27日、28日に、中央民族大学民族学与社会科学院社会学系、中央民族大学”985工程“民族發展与民族關係問題研究中心、および日中社会学会の共催によって、国際学術シンポジウム「中国研究の可能性と課題——新しい社会構想の実験場として」(中日社会学会学術検討会「中国研究的可能与課題」)が開催されました。

昨年末、このシンポジウムの開催について知った時、思わず条件反射で「ぜひ行きたい!」という気持ちに駆り立てられました。いつもは、学会大会などでの報告を考えた場合、報告する題材はあるのか、題材があっても期日までにペーパーをまとめることが準備できるのか、学期期間中の渡航の場合は、授業の準備などは?・・・など、いろいろなことを考えてしまうものですが、今回は、「このシンポジウムだけは、学期中だけでも、そういう諸条件を何とかクリアして参加したい!」という意気込みが生じて、その思いが日に日に強まっていきました。それは、言うまでもなく、このシンポジウムが中央民族大学で開催されるという理由からでした。(このシンポジウム開催のために、これまで尽力されてきた日中の諸先生方とは、思い入れのレベルが違って非常に申し訳ないのですが。)

ここで少し、シンポジウムとは関係のない話をさせていただきたいと思います。私的な話になりますが、大学時代の1989年、大学の春休みを利用して、中国へ語学短期研修に行くことを決めました。その語学研修先が、今回シンポジウムが開催された中央民族大学(当時の名称は中央民族学院)だったのです。

大学の語学の授業で中国語に興味を持ったことや、前年の内モンゴル自治区の旅行の体験から、少しでも少数民族に関連のある学習機関で中国語を学びたい・・・という単純な理由からでした。当初はそのような軽い気持ちで、中国へ渡航したのですが、中央民族大学での短期滞在時における様々な見聞を通して、中国語と中華・アジア社会への興味が、一気に増すこととなりました。それは中国語を学んで、少数民族の友達を作ることができればOKだと考えていた自分にとっては、まさに予想外の「副産物」でした。そして、その直後の大学のゼミ分けの際には迷わず、中国社会に対するご研究を積極的に行なっておられた宮城宏先生(日中社会学会第3代目会長)のゼミに、多くの希望者にジャンケンで勝ち抜き、入らせていただくことになりました。

ゼミでの2年間は、宮城先生から山東省での調査のお話や、関西社会学者訪中団のお話や、これまでの留学生とのかかわりといった興味深いお話を伺い、先生の研究者として、また教育者としての中国との交流に対するご姿勢に感銘を受け、学ばせていただいたことは非常に多く、宮城先生にご指導を受けながら、大学入学時には考えてもみなかった「研究」という道も、進路の中の1つの選択肢として積極的に考えるようになりました。そうして、学部時代および大学院時代に2回にわたる海外長期留学をする機会を得ることができましたし、大学院時代には、中国との学術交流に積極的で、中国社会について理解が深い塩原勉先生にもご指導していただけることになりまして、非常に恵まれた大学・大学院生時代を送ることができました。日中社会学会に深く関わってこられた両先生とのご縁から、実力が伴っていなかったにもかかわらず、日中社会学会の入会に推薦していただいたことも非常にありがたいことでした。その後は、海外(シンガポール、香港)にて、中国周辺地域に関する研究を続けることにな

りましたが、自分にとって、この道を歩むことになった最初の大きなきっかけは、やはり19年前の中央民族大学であったと言えるのです。

話はシンポジウムに戻ります。19年ぶりに訪れた懐かしい中央民族大学ですが、大学の前の「白石橋路」と呼ばれた自転車の多い（たまに馬車！も見かけた）大通りは、整備され拡張されて、乗用車の交通量も格段と多くなっており、名称も「南関村南大街」に変わっていました。大学構内に足を踏み入れると、「老楼」と呼ばれたかつての2階建てのレンガ造りの校舎や学生宿舎の約半分が姿を消して、近代的な「教学楼」などに姿を変えていました。シンポジウム会場はキャンパスの中央に位置する新しい「教学楼」の中にある、音響やスクリーンなどを含めた最新のオーディオ設備が整った素晴らしい大教室でした。（中央民族大学の包智明先生は、最後のスピーチの中で「この教室のスクリーンが学内では最も見にくい」とおっしゃっていましたが、私にはそうとは思えませんでした。）

今回のシンポジウムでは、日中それぞれの代表の先生によるスピーチ、および日中の22人の報告者による19の報告が行なわれました。内容は、移動、福祉、家族、都市、環境、文化など、多岐にわたるものでありました。私は、中国（国内）の社会における諸問題に対しては、非常に勉強不足で知識も浅いために、中国研究のベテランの先生方の報告について、何か感想を述べたり、総括したりするには、資格不足であることは承知しておりますが、今回、参加記を書かせていただくにあたり、僭越ながら、感想を記させていただくことにいたしました。この多岐にわたるそれぞれの報告には、1つの大きな共通点があったと思います。その共通点とは、それぞれの報告の中で、社会や事象に内在する問題あるいは特徴が明確に指摘され、また、それらの問題や特徴が客観的に分析されていたこと、そして、

それぞれの問題を通して、当該社会全体（現在、過去を含めて）を再考し、過去の反省を含めて、未来につなげることができる新たな視点が投げかけられている点だと思いました。もちろん、それぞれの報告は、このシンポジウムのテーマである「中国研究の可能性と課題」について大きく関連しているものでした。

フロアからの質問内容も、有意義なものが多かったと思います。今回のシンポジウムでは、中央民族大学の社会学や民族学を専攻する多くの学生も報告を聞きに来ており、彼らからの質問も多く、学生の中国社会の諸問題に対する関心の高さに驚かされました。時間の制約もあり、すべての質問について対応する時間がなかったことは残念でしたが、少しの時間であっても、現地の学生さんとこのような時間を共有することができたということも、私にとっても非常に貴重な体験となりました。

閉幕式での先生方のスピーチでは、あらためて、日本と中国の社会学者による今回のシンポジウムが実施されるにいたるまでのお話があり、「中国にて日中の社会学者による研究大会を開催すること」は、1980年に日中社会学会が発足した際の、第一代会長であられた福武直先生の強い念願であったというお話を伺いました。そして、このシンポジウム開催までの長い道のりには、多くの先生方のご尽力があったということに思いを馳せました。ちょうど、前回のニューズレターで、日本社会学会顧問で成蹊大学名誉教授である安原茂先生の訃報を知りましたが、農村社会学、地域社会学がご専門であった安原先生は、1980年代より中国の農村調査を積極的に進められ、福武直先生、青井和夫先生、宮城宏先生といった日中社会学会歴代会長を支えながら、後進の育成にも力を注がれ、日中社会学会だけではなく、日本の社会学にも大きく貢献されてこられました。こういった諸先生方の長年

のご努力、ご尽力の積み重ねによって、今回のシンポジウムの開催に至ったということに思いを及ばせると、非常に感慨深いものがありました。

今回、このような記念すべき、有意義なシンポジウムが無事にとどこおりなく行なわれましたのも、シンポジウムの準備を早い段階から効率よく進めてくださっていた日中双方の実行委員会の先生方（日中社会学会会長の中村則弘先生、事務局の首藤明和先生、中央民族大学の包智明先生および艾斌先生、その他実行委員会の諸先生方）のおかげだと思っております。同時に、シンポジウムへのエントリーおよび報告原稿の締め切りから、シンポジウム開催当日までの短い日程の間に、会議用のハンドアウトの印刷、同時通訳や宿泊施設などの手配をすべてとどこおりなく準備してくださった中国側の先生方にも、この場をお借りして、あらためてお礼を申し上げます。

最後に。今回のシンポジウムの会場が、個人的に思い入れのある中央民族大学であるからという単純な動機で、参加を申し出たにもかかわらず、貴重な参加の機会をいただけたことに対して、関係者の諸先生方には心から感謝の気持ちでいっぱいです。今回は、学会の諸先輩方の志を常に心にとめながら、一歩でも諸先輩方に近づけるために、日々努力を重ねたい・・・という思いを強くしたシンポジウムでもありました。本当にありがとうございました。

国際シンポジウムと街の変化

長田洋司

3月27日と28日の両日、中国北京の中央民族大学において、日中社会学会・中央民族大学共催の国際シンポジウムが開催された。私は、そこで研究発表をさせていただくチャンスをいただき、開催前日の26日に北京に到着した。中央民族大学は、北京市の西側、国家図書館から北にすぐ近く、中関村の南側に位置するのだが、私にとっては特別な感慨を抱く場所でもあった。私は、2004年の6月から約10ヶ月間、民族大学から歩いて10分ほどの場所に住む友人の家に身を寄せながら、毎日のように国家図書館に通いつめて資料を集め、読みあさっていたからである。



当時のこの地域は、北京の東側、国貿や三里屯といった開発が進み、高層ビルが立ち並ぶ場所とは対照的に、まだまだ整備途上であり、民族大学のすぐ近くの魏公村のあたりは、新疆人を中心としたコミュニティがあって、そこかしこに羊肉串の香辛料の香りがたちこめるような雑多な地域があった。今振り返ってみても決して衛生的な感じでなかったように思う。逆にそういった下町的雰囲気のある場所が好きなのは、当時、朝から夕方までは図書館、17時に図書館を出るとたまに足を伸ばしてその近辺を散策するといった生活をしていたものである。しかしそれが、今回、久しぶりにこの地域に来て、その変貌ぶりを目の当たりにしたのである。道はきれいに舗装され、周囲のレストランも以前よりも清潔感が増し

2004年

たような感がある。それもこれも、2008年の北京オリンピックが一つの契機になっているのだろう。民族大学から程近い白石橋のあたりには首都体育館があるのだが、オリンピック競技が行われるということで改築され、その周辺の環境も非常に改善されたからである。



日本で東京オリンピックが行われた時期もきっとそうであったのだろうが、つくづくオリンピックを自国で開催することの意味の大きさを痛感する。昔を懐かしみながら、あの風情のある景観がなくなることを惜しむ気持ち以上に、きっと住んでいる人々にとっては大きくその利便性、衛生面でプラスになったのであろう。

さて、シンポジウムに話を戻すが、今回のシンポジウムは様々な面で意義深く刺激のあるものであったと感じた。まず、中国で開催されるシンポジウムにもかかわらず、参加した日本人研究者と中国人研究者の比率がほぼ同じであったということである。次に、それぞれの報告者がみな、基本的に母国語で発表をし、同時通訳をしてくれたということである。そして、中央民族大学の学生の皆さんが非常にきめの細かい運営サポートをやってくれたということである。こうしたことすべては、大会運営を取り仕切られた包智明先生ほか民族大学の諸先生方のお人柄とご尽力の故であると切に感じた。特に同時通訳に関しては、日中の研究者達が言語の壁を越えて、自由で活発な議論を展開する上で非常に大きな役割を果たしたと思う。通訳者の日本語も非

常に聞き取りやすく、リラックスしてシンポジウムに参加できた一要因となった。

また、刺激になったのが、先ず何よりも民族大学の学生からの活発な質問である。えてして日本でこうしたシンポジウムを行うと、学生の側から活発な質問や意見を受けることは稀である。それはやはり意見を言うのが恥かしい、間違ったらどうしよう、といった心理から来るものだろうが。中国の学生には、間違いを恐れず、積極的にアプローチしてくる姿勢がある。それは自分にとっても非常に刺激になったことである。

シンポジウムは二日に渡って、約20名の報告があり、スケジュール的には非常にタイトなものであった。



しかし、それを感じさせないほどに、各先生方のご報告は非常に興味深く、中国研究の視点の広さ、問題意識の豊富さ、研究内容の深みを味わせていただいた。アジアという非常に多様性のあるこの地域をフィールドとして、アジア人の視点から実証研究を進めることの醍醐味と面白さを感じさせていただけただいた最大の収穫であったようにも思えます。シンポジウムの最後に中村会長がおっしゃっていたように、今後、日本人研究者と中国人研究者が共に協力して中国や日本のフィールドを歩く時が一日でも早く実現することを切に願うばかりである。